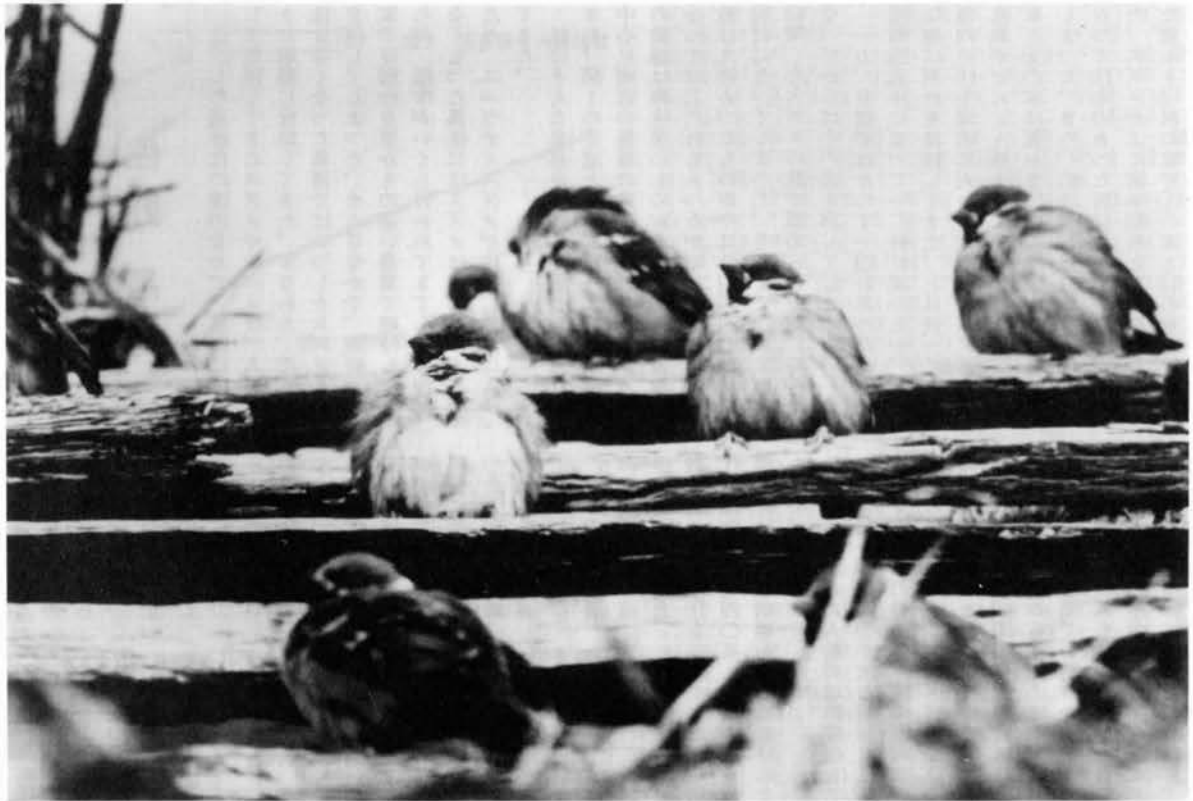


山と博物館

第34巻 第4号 1989年4月25日 大町山岳博物館



休息中のスズメ(北大東島にて)

大東島のスズメたち

佐野 昌男

日本地図を広げると沖縄のはるか東方海上に大東諸島が目に見え込んでくる。沖縄本島からおおよそ三九〇キロメートルも離れた孤島である。大東諸島は南島と北島と沖島(ラサ島)の三島からなり、現在は南北両島に人が住んでいる。

さて、この島に人が住むようになったのは、今からおおよそ九〇年前で、八丈島の玉置半右衛門という人が三人の島民を募り上陸したのが始まりである。そして、両島は開墾されサトウキビ栽培をして、砂糖の島として現在に至っている。したがって、この人たちの上陸当時は原生林がうっそうと繁り、もちろんスズメなどいるはずもなかった。

私は昭和五十六年の暮に初めて北大東島を訪れた。もちろん、距離的な理由からスズメは住んでいないだろうと予想していた。ところが、予想はくつがえされたばかりでなく、この島が日本一のスズメの高密度地域であることが明らかとなった。それまでの調査結果では北海道の奥尻島で一二八〇羽/km²という値を得ていたが、何と北大東島では一〇八六二羽/km²だった。

島の古老に訊ねると、スズメは戦後姿を見るようになり、当時行っていた麦に被害が及んだとのことである。これらのスズメの渡来は多分に偶然が重なったものと思われるが、秋の若鳥の大量が西高東低の気圧配置の中で強い季節風を受け、太平洋上へ吹き飛ばされ、たまたまこの島へたどりついたのであろう。食料増産で一時、麦やキビの栽培をしているこの島は、スズメたちによほど気に入られたようで、その後ほとんどふえ続けたが絶海の孤島のため若鳥の移動が不可能で、スズメ溜り”となってしまった。

私はこんな高密度状態が長く続く訳がないと考えているので、今後とも注目していきたいと思っています。

(長野市立塩崎小学校)

人とスズメ

佐野 昌男

○過疎化により減少していくスズメ

北信五岳の一つ斑尾山麓に点在する山間地集落は、それまで稲作や木炭生産で食べてきた。しかし、昭和四〇年代に入ると日本の高度経済成長と米余り現象が起り、減反政策の波がここ奥信濃にまで押し寄せてきた。一軒およそ七〇アールそこそこしかない水田まで減反されたのはひとたまりもない。そこで、ここに住む人々は自然条件のよくない当地での稲作をあきらめると同時にこの地から里へ下り始めた。

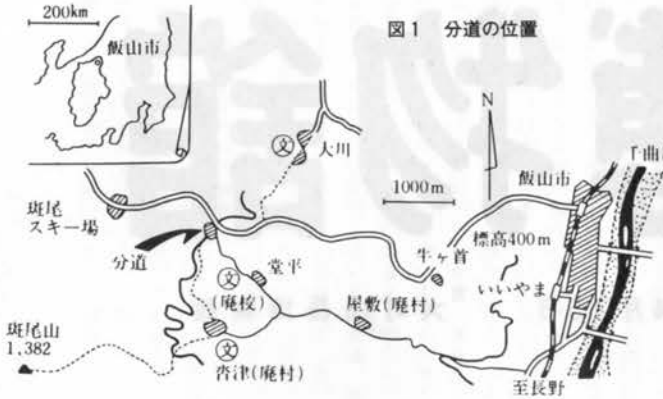


図1 分道の位置

こうした過疎化の波のなかで、集落に依存して生活してきたスズメやツバメは、人の動きに敏感に反応してきた。すなわち、だれも住まなくなった集落ではいつしかスズメも姿を消してしまった。そんななかで、幾軒かの家では稲作を里からの通い農業で維持してきたが、稲作がいくらか行われても人の住まなくなつた集落にはスズメは現れなかつた。ただ、ニューナイスズメが代りに集落に入ってきた。

私はそんな集落をこれまで幾つか調査してきた。図1の分道という人家一二軒の集落を中心に周辺の集落の過疎化にともなうスズメの動態は興味深いものがある。図1の沓津はかつては二六軒もあったが昭和四七年に、屋敷は九軒あったものがやはり昭和四七年に、廃村になつてしまった。それまで、人家数に相関したスズメの数が認められたが、廃村になつてからはその姿を消してしまった。

一方、分道ではかつて一四軒あった集落が昭和四五年になつて一二軒に減つたが、それ以後は現状を維持してきた。とは言つても集落内の住宅環境は大いに変わり、スズメの生息数がどんどん減少している。例えば、⑦の家と⑨の家は萱ぶき屋根の母屋がなくなつてしまった。また、公会堂が撤去された代りにかつて住宅のあった所に生活センターができた。スズメがよく営巣場所として利用してきた萱ぶき屋根の家が①の家と⑫の家だけになつてしまった。昭和六三年には④の家が里に下つてしまった。その後、一時的かも知れないが⑩の家の隣にある別荘に斑尾のホテルで働く若い夫婦が住むようになった。人口も昭和四〇年代には六五名前後いたものが現在では三五名前後に減つてしまった。現在の分道の様子を図2に表した。

このような環境の変化や人口の減少にも大きな変化を与えてきた。昭和四〇年代には毎年平均四〇果もの営巣数を数えたが、現在では一二巣前後を数えるだけになつてしまった。

図3はこれらの人的環境の変化とスズメの巣の分布を昭和四〇年代と昭和六三年とを比較してみたものである。図の縦軸は、分道を北から二五メートルずつ区切つていったときの区分で、図2と対応している。図を見ても明らかのように、四〇年代の営巣数と巣立ち率の高い所はgからjであるが、これは図の人数の多いところを見ても明らかのように、ここに約半数の三二人も集中していたからである。ところが、六三年の人数分布を見ると、その中心はdの③の家に移つた。しかも、この家

は民宿をやり始めたので、常に不特定多数のお客が入り込んでおり、さらに人数を押し上げていたのである。営巣数も半数の五〇パーセントがここに集中している。

このように、分道のような小さな集落でも集落の構造の変化や人の動態がスズメの生息数に影響を与えているということが、人の住む中心部の移動によりスズメの営巣場所の中心部移動という具体的な事実により明らかになった。

○漂鳥スズメから留鳥スズメへ

広大な斑尾山麓にスキー場とホテル・ペンション街が最初に営業を始めたのは、昭和四七年の冬からで、鉄筋コンクリートの斑尾観光ホテルと七軒のペンションだった。標高お

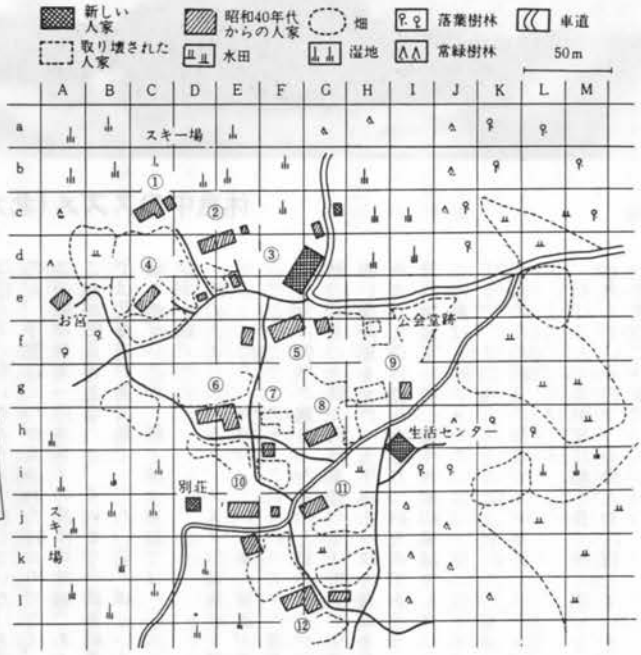


図2 分道の人家配列(63年10月)

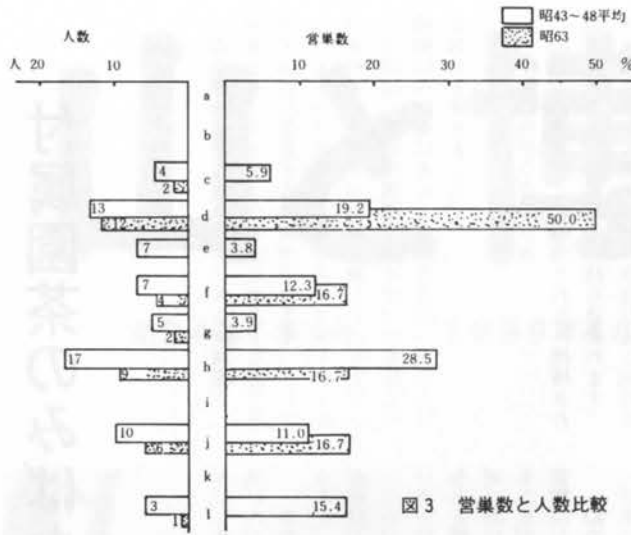


図3 営巣数と人数比較

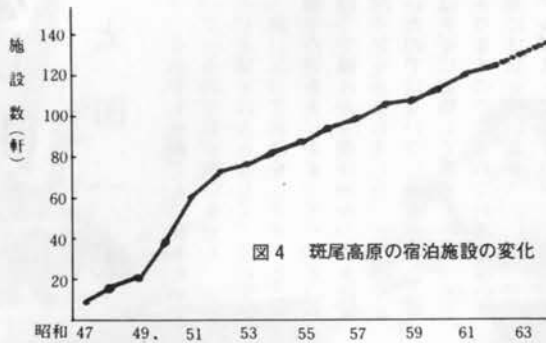


図4 斑尾高原の宿泊施設の変化

よそ一〇〇メートルのこの斑尾高原は、分道よりさらに積雪が多く風も強い所である。したがって、建物は堅牢で、すき間など全くないと言っても過言ではない。

私は、さっそく八軒の建物を中心にスズメが繁殖を始めたかどうか、開設の翌年の昭和四八年の春から調査に入った。まず、四八年に三巢、四九年に六巢発見した。一見、スズメが営巣するような所はないようだったが、彼らはたくみに営巣場所を探し出し繁殖していることが分かった。例えば、コンクリート壁にうがたれている換気孔だった。しかし、この穴は非常に狭くて、スズメ一羽入れるのがやっとといったところで、たとえ卵が全部ふ化しても最初のうちは順調に雛が育つが、成長するにしたがって強い雛が上へ出てきて

弱い雛は下に踏まれるばかりか餌にありつけず、結果的に一羽しか巣立てないという効率の悪さである。また彼らは電柱上部にある角パイプの中へも営巣していた。

このように斑尾高原での限られた建物の中で、スズメたちの住宅難は深刻だったが、スズメたちは三年目あたりからこの住宅難を解決していった。それは、イワツバメの巣を占領することだった。斑尾高原に突然現れた大イワツバメは見逃がすがなく、さっそくホテルの軒へびつしりと巣を並べた。それに気付いたスズメは、体力的にイワツバメより勝り、イワツバメを追い出して自分がそこで繁殖をするようになった。しかし、これらのスズメがどこから入ってきたのかは分からない。彼

らは繁殖が終るとどこかへ姿を消し、春再び繁殖に上がってくるという漂鳥的な性格をもつ不思議なスズメたちである。

このようなスズメの存在は、分道のスズメのように住み着きの場をもち一生そこで過ごすスズメの存在とは相対するもので、殖え過ぎたスズメたちはあちらこちらを常に漂流生活していて、どこか空いたなわばりや新しい集落などを見つけたとそこへ入り込んで繁殖し、繁殖が終ると再び漂流生活をしているようである。しかし、繁殖のため入り込んだ集落の環境がよく、冬のしのげる所であればそのままそこに居着いてしまいい住鳥化していくようである。

図4に示すように斑尾スキー場では毎年およそ一〇軒くらいの割合でホテルやペンションが増えてきた。それにつれスズメの営巣数も増えているが依然漂鳥的存在である。昭和五二年には七〇軒を突破し、集落の面積も非常な広がりを見せってきた。そして、この年の二月、初めて冬のスズメを一羽発見した。このスズメは足環が着いていなかったため、分道から上がったものとは考えられなかった。

しかし、この一件は冬といえども斑尾スキー場でも餌の供給という生息環境が満たされれば、スズメの留鳥化が可能であることを示してくれた。そして、昭和五四年の冬、一八羽のスズメがあるホテルの裏の白樺に群れているのを発見した。その木の下にはホテルのごみ捨て場があり、そこが彼らの餌場だった。ねぐらもそのホテルの木造ベランダの軒下だった。

こうして、斑尾高原のこれまでの漂鳥スズメが名実共に留鳥スズメとして年間生息するようになった。

これは、スズメばかりでなく、ムクドリやハシブト・ハシボソガラスやトビをも留鳥化させ、斑尾高原は急速に村落化している。

(長野市塩崎小学校教諭)

斑尾スキー場のホテル・ペンション街がスタートした当時、各ホテルやペンションから出たごみや台所くずなどはきちんとパックされ、週二回のごみ収集車によってきれいに持っていかれた。ところが、最近ではホテルやペンションが増え過ぎ、そこから出るごみの処理が思うようにならなくなり、生ごみや燃えるごみを自分の所で処理するところが出てきた。しかし、生ごみは残ってしまい、それが結果的に冬のスズメの餌の供給を保障することになり、斑尾スキー場のスズメの留鳥化を実現した。



育雛中のスズメ(大町市にて)

付属園茶のみばなし(1)

太田 一夫

山岳博物館では館の裏手にある付属園で、カモシカ、ライチョウをはじめとする北アルプス周辺に生息する動物やコマクサ、ヨーロッパ・アルプス周辺に棲むアルプス・マーモットやオオライチョウを公開しています。

今回は、この付属園でライチョウを除く一般動物の飼育にあたってはいる太田一夫さんにお話しを聞きました。

好物のちがうカモシカ

山林や人里ちかくで保護されたり捕獲されたカモシカが、毎年何頭か持ち込まれます。そんなカモシカたちは、いきなり人工飼料を口にはしません。そこで最初は木の枝葉を与え、徐々に人工の餌に馴らしていきます。

現在、餌づけ中のカモシカには通称成男と年男がいます。成男はヒノキとマサキ、それにピンカ(ハイイヌツゲ)しか食べませんが、年男はヒノキやマサキのほかにイチイやササも食べます。イチイを食べるなんて珍しいことです。また、以前飼育していた元男は、何を与えてもマサキしか口にしませんでした。山で食べていた植物のちがいでしょうか、同じカモシカでも好みはかなり異なります。

苦労するサルの飼育

オス二頭をひとつの飼育舎に、メス二頭(チビと博子)を別のところに飼っています。オスのほうは気が荒く、とても一緒に入って餌くれや掃除ができませんので、隔離してか

らにします。それでも金網ごしに歯をむいて飛びかかってくるので気が抜けません。

一方のチビと博子はおとなしく、なれているので、一緒に入って世話をします。ところが先日、博子だけを先にかまってやっていたところ、怒って後ろから飛びかかってくる。いチビに尻や足をかまれました。チビはやきもちを焼いたのではないのでしょうか。ところが、時にはチビに加勢して博子もかかってくる。世話のし方には気を使います。

幻のアルプス・マーモット

日本でここだけにオス一頭、メス二頭がい



餌づけ中のカモシカのエサづくり

て、それぞれマーモ、リリー、ナナという愛称までも頂戴しているのに、あい変わらず人影を見ると遊び場からトンネルへ飛び込んでしまします。こちらが静かにじっとしていると、ビクビクしながら遊び場に出てきて、餌を手に持ってチョココンと立って食べる可愛い仕草を見せてくれるのに、残念です。無理やりトンネルの口をふさぎ、隠れ場のない外に出しつばなしにすれば、この神経質な動物はストレスで死んでしまいかねません。何かよい手はないかと考えています。

また、遊び場には土盛りが二カ所あるのですが、いったいいつやるのやら、縦横に穴を掘ったり、土をかき出したりで荒涼たるものです。芝を張りつめたり、木を植えたりしたこともありますが、三日ほどの夜間工事でもとに戻してくれました。

困った出来事

サル 飼育動物のなかでいちばん可哀想なのはオスザルです。これから修学旅行シーズンですが、訪れる中高生の中には、木の枝などからかたり、キャラメルやアメの包み紙に小石を入れて投げ込んだりする人がいます。サルは怒って金網ごしに飛びかかるので、また喜ばれていたずらされる。ますます性質がいじけてしまうので、やめてほしいものです。植物も大切な展示物。タヌキ舎の横には小さな池があり、周囲に様々な植物を植えてあります。タラの木もそのひとつですが、毎年芽をとられます。今年はおもぎとろうとしていたおばさんを目にしたので注意をし、ほっとしていた矢先にまたとられてしまいました。コマクサ園も同じです。毎年、五月の中旬に花をつけるようになると、柵の中にこそ入らないものの、外から手を伸ばしてとれる範囲の

ものは根こそぎくなります。とってはいけませんと、わざわざ大人むけの看板を立てなければいけないのでしょうか。

ベツトは迷惑。三月でしたか、朝方付属園の近所でコケコッコ音が聞こえました。オンドリが一羽捨てられていたのです。四月のはじめには老令なつがいの地鶏が捨てられていました。卵も産まないし、鳴き声はうるさいし、殺すのはいやだし、という人が山岳博物館ならなんとかしてくれと捨てていったのだと思います。時おりネコがうろついたり、アヒルの雛が玄関先でつめたくなっていたこともあるそうです。ライチョウをはじめ、家畜の病気や危害にとでも弱い動物がいますので、無責任なことはいらないでほしいですね。

困った出来事をいろいろ話しましたが、大部分のお客さんは真面目な方で、楽しく見学していかれます。付属園は博物館から歩いて三〇メートルたらずですが、山腹の急傾斜地です。バス旅行中の大トラ小トラにはそんな坂道を登る気がないわけでしたすかります。私ら実年世代には山坂の登り下りはよい運動なのですがね。

次回はライチョウ、オオライチョウの飼育にあたってはいる北條廣美さん、森山祐介さんにお話しを聞きます。(聞き書き 峯村)

山と博物館 第34巻 第4号

発行所 長野県大町市 一九八九年四月二十五日発行

印刷所 大町市 山岳博物館

印刷所 長野県大町市 大町市 山岳博物館

定価 年額 一、二〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号 長野四一三二九九三